
「楽しい」が育むスポーツの未来②
～モルックが教えてくれたスポーツの魅力～

子どもの権利擁護委員 小笠原 仁美



前は、子どもたちを取り巻く運動環境の変化と、楽しさや交流を大切にするレクリエーショナル・スポーツの考え方について触れました。今回は、その一つである「モルック」を通して、私自身が感じたスポーツの魅力をお伝えしたいと思います。

レクリエーショナル・スポーツには、モルック、ボッチャ、インディアカ、グラウンド・ゴルフ、スポーツウェルネス吹矢、他にもまだまだたくさんあります。

その一つであるモルックは、フィンランドで生まれたスポーツで、木の棒（モルック）を投げて数字の書かれた木製ピン（スキttl）を倒し、50点ちょうどを目指して得点を競います。ルールはとてもシンプルですが、「次はどのピンを狙うか」「相手に有利な形を残さないにはどうするか」など、戦略性もあり、年齢を問わず夢中になれるスポーツです。



私自身、モルック大会で小学生のチームに敗れた経験があります。正直なところ、「子どもに負けるわけがない」と思っていました。しかし、試合が始まると子どもたちは狙ったピンを正確に倒し、得点を計算しながら「次は○番を狙おう」と相談し、落ち着いて投げているように見えました。一方、私たち大人チームは、意気込みすぎて思うようなところに投げられず、その結果、敗れてしまいました。

悔しい気持ちはありましたが、それ以上に「なるほど、モルックはこういうスポーツなんだ」と実感した出来事でもありました。勝敗は、力の強さや体格だけで決まるものではありません。年齢も性別も関係なく、それぞれの持ち味を生かして対等に競い合うことができます。そして試合が終われば、お互いの健闘をたたえ合い、自然と笑顔が生まれます。そこには、勝敗だけでは測ることのできないスポーツの魅力があります。

私は日頃、レクリエーション活動に関わっており、その中で多くの子どもたちと関わってきました。「運動は苦手だから……」と話していた子どもが、ゲーム感覚で楽しめるレクリエーションに参加すると、笑顔で「もう一回やりたい」と言ってくれたこともありました。楽しさには、人の気持ちを前向きにし、「やってみよう」という一歩につながる力があると感じています。

子どもたちに必要なのは、必ずしも高い競技力を身につけることだけではありません。競技スポーツに打ち込む子どももいれば、自分のペースで体を動かすことを楽しむ子どももいます。そのどちらも大切であり、どちらも尊重される社会であってほしいと思います。

スポーツを好きになるのに、特別な才能はいりません。必要なのは、「楽しかった」という経験です。その経験は、「またやってみたい」という気持ちを育み、生涯にわたってスポーツや運動に親しむきっかけになります。

子どもたち一人ひとりが、自分に合ったスポーツと出会い、「体を動かすって楽しい」と感じられる。そのような経験が地域の中で積み重なっていくことが、子どもたちの健やかな成長と、生涯にわたるスポーツとの豊かな関わりにつながっていくのではないのでしょうか。

